

研究区分	学部研究推進
------	--------

研 究 テーマ	海外授業及び海外フィールドワークの実践（継続）				
研究組織	代 表 者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	小針 進
	研究協力者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	奈倉 京子
		所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	米野 みちよ
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	堀内 賢志
	発 表 者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	小針 進

講演題目
国境を越えた海外授業と学生間の交流によるアドミッション・ポリシーの具現化
研究の目的、成果及び今後の展望
本プロジェクトは、本学部の学生を海外の大学生と交流させる（海外授業）、あるいは本邦にある外国の文化や外国人と接触させることによって、「国際関係学部アドミッション・ポリシー」の具現化させることに大きな目的がある。実施してきた海外授業や外国・外国人への接触は、コミュニケーション力、論理的思考力、文章の読解力や表現力、当該国に関する基礎知識と語学力、知的好奇心、探究心、情報収集力、他者理解に必要な想像力を、学生たちに育むことができたと自負している。 具体的には、教員別に次のようなことを、学生と行った。【小針】韓国の東西大生との対面による日韓合同セミナー（釜山）、光云大生との静岡での対面による日韓合同セミナー、【奈倉】池袋（東京）での中国人集住地域と立教大でのフィールドワーク、蘭州大学西北民族学院とのオンラインセミナー、【米野】焼津、浜松、兵庫、愛知でのフィリピン事情と関連したフィールド調査、学生のフィリピン語スピーチコンテスト参加（優勝および同率2位の上位3名入賞を独占）、【堀内】ロシア人僧侶の寺院でのセミナー参加と日露戦争関連史跡の見学（大阪）。なお、日中関係の不安定性・悪化、ロシアとウクライナの戦況によって、訪中および訪露を伴う対面による海外授業は行い得なかった。 それぞれの取り組みから、大きな教育効果を生んでいる。たとえば、代表である小針の場合、次のような成果があった。2025年は日韓国交正常化60周年にあたり、光云大生との日韓合同セミナー（6月24日、於：本学）でも、東西大生との日韓合同セミナー（11月4日、於：釜山）でも、これまでの両国関係を振り返り、今後の協力に関する提案型の議論を行った。参加規模はいずれも30人程度による討議であり、主な使用言語は前者が韓国語を、後者が日韓両語であった。 前者では、本学側が「日韓の和合と関係発展のために必要なこと」について、光云大側が「韓日両国のマスコミの比較」についてプレゼンテーションをつうじた全体討議を行い、その後は4つのグループに分かれ、組み合わせを変えながらグループディスカッションを行った。この模様は、NHK 静岡放送局のニュース番組「たっぷり静岡」（6月26日）で報じられただけでなく、NHK ワールド JAPAN（約160の国・地域の約4億6,000万世帯で視聴できる英語によるテレビ放送）のニュース番組（7月17日放映）で紹介され、本学のパブリシティ効果も高める効果を生んだ。 後者では、本学側が少子・高齢化、晩婚化、首都圏一極集中など、両国が共通する社会課題解決のため、相互に学び合う姿勢の強化を提案した。東西大側は、両地域の特性を考えて、釜山のカフェ文化と静岡の特産品であるお茶を掛け合わせた「釜山×静岡 お茶カフェフェスティバル」の開催提案があった。それぞれの提案の過程では大きな学びをもたらした。今後も国境を越えた学生間の交流を行うことで、アドミッション・ポリシーを具現化させるべきだ。対中・対露関係の回復も望まれる。